

第五章 人の一生

## 第五章 人の一生

### 第一節 結婚

#### 一 結婚とはどのようなものだったのか

婚

期

学校を出ると、女の子たちは農閑期のうかんきを利用して裁縫教室さいほうきょうしつへ通ったり、家事を手伝ったりして、嫁入りの時期を迎える。そして二〇歳前後の年ごろになると、世話好きな人などから結婚相手をいろいろと紹介されるようになる。小学校のときの同級生であるとか、遠縁であるとかという場合が多かったようだ。もつともこうした話は、たいてい親と交わされることが多く、本人は結婚式当日まで相手の顔すらみることがないということも珍しいことではなかった。また、親戚つきあいをできるだけ広げないようにするために、血縁のある家から結婚相手を決めることも多かった。親戚つきあいの範囲が広いと、冠婚葬祭などに伴う経済的負担も大きくならざるを得ないためである。両人のお互いの意思などはあまり問題ではなく、

親に「いけ」といわれて、「くれらつちえいった」というケースが多い。「いやだ」といっても無駄だったなどと語る人もいた。今日のような自由意思による恋愛もなかったわけではないが、数は多くはなかったようだ。

### チャイレ

矢吹町では、結婚相手を紹介したり、結婚をとりもつたりする人をゴシナンサマ・ナコウドという。男性を特にゴシナンオトサン（ゴシナンオドツァなど）、女性をゴシナンオカーサン（ゴシナンオツカアなど）とよぶこともある。

結婚の約束を両家で交わすための「結納かひなう」のことを、矢吹町ではチャイレという。チャイレは、まず、嫁または婿をもらう方の家（以下「婚家」）からの結納金と結納品をゴシナンサマ（男性のみという場合もある）が持って、嫁または婿の家（以下「実家」）へやってくる。結納の品物の数は、五品ごしな、七品ななしななど家格によって異なる。具体的には小袖や帯などといった衣類が多かったようだ。また、そのほかに酒一升しよと親族書や目録、お茶を一袋持ってくる。そして、結納品などの交換をした後、持ってきた茶をいれて飲むというのが一般的のようだ。しかし、チャイレは親とゴシナンサマとの間で交わされるものであったため、本人はほとんどこの儀式にかかわることはなかった。そのため、このチャイレについては「だって、自分の知らない所でやることだから」と詳しく知る話者はなく、具体的などころは不明な点が多い。

三神『郷土誌』によれば、このチャイレについて次のような記述が残されている。

#### 茶入結納の儀式

婚儀をなす時は初め茶入及び結納（茶・金）媒酌人（ナカウド・ナコウド）は両人父母兄弟近親の承諾を得れば吉日を選びて茶入結納の儀式を行ふ。当日は取方の家より茶包と茶金若干を持ち酒を朱塗の樽に入れて媒酌人伴一人を連れて（小児）呉方の家に行きて持参したるものを出し先方で饗応あやうれをうけ再び取方に帰りて顛末を報告するなり。

この記述によると、チャイレは、まず、婚家より茶の包みとお金、酒を持ったゴシナンサマが幼い子どもを同伴して実家へいき、そこで饗応を受けた後、再び婚家へ戻ってきて報告をおこなうことになっている。話者からは子どもを同伴していたという

ことは聞かれなかったので、昭和の時代にはこうした作法はすでに簡素化されていたのかもしれない。

## 二 結婚式次第

### 結婚式

戦後、人生儀礼は大きく変容した。出産、結婚式、葬儀、そのいずれもがかつては自宅でおこなわれていた。しかし、今日ではむしろこうしたもの、すべて「施設」でおこなうのが当然であり、自宅でおこなうものであるという認識すら消えかかっている。

今日、結婚の形態が多様になってくるに従って、結婚式も従来の伝統にこだわらない自由な形式でおこなう夫婦が増えてきた。結婚式や披露宴は、親類や近所の人たちなどにお披露目をする、すなわち、地域社会の一員として迎え入れるという伝統的な意味を持つ儀礼としてよりも、ショーとしての要素が強くなり、演出なども凝ったものになってきている。自宅でおこなわれていたころの面影もほとんどなく、儀式は形骸化<sup>けいがい</sup>し、伝統的な作法もその多くが姿を消した。

しかし、昭和の中ごろまでの結婚式は、「家と家との結びつき」という意味が強く、互いの家を往来することによって儀式が成り立っていた。

矢吹町の場合、簡単に述べれば、まず婿方<sup>むこがた</sup>から嫁方<sup>よめがた</sup>へ嫁を迎えにいき、その後、嫁と嫁の親や親戚などをつれて、婿方へいく。そこで結婚式と披露宴をおこない、翌日は花嫁が舅<sup>しゅう</sup>につれられて里帰りをするというのが一般的であった。

このように大きな変容を遂げた婚姻の儀礼について、かつての姿を明らかにするのは、今日では、実に困難な作業であると感じることが多くなった。結婚式の調査では、「自分の結婚式なんて、なにがなんだかわからないままに終わっちゃった」という言葉をよく聞いた。確かに、本人たちは儀式の進行などに際してはほとんどかかわらない。ただ成り行きのままに動くだけである。「どこの家に行くのかもわかんなかった」などと笑って話してくれた話者もあつたほどで、前項で述べたように、結婚は、親同

士が了承して進めていくものであった。そして、話者らの子どもたちが結婚をすることは、すでに新生活運動や高度経済成長の時代であるから、「結婚式場」での結婚式となり、両家を往き来した結婚式はおこなわれなくなっているのである。

### 嫁入り

それでも幸いなことに、矢吹町の郷土誌には、わずかだが資料が残されている。こうした資料も引用しながら、矢吹町の「嫁入り」の場合の結婚式について明らかにしていきたい。

では、実際に結婚式と披露宴はどのようにとりおこなわれたのかを順を追ってみていこう。

結婚式をゴシユウギというのは、ほかの地域とかわりはない。これは、大安たいあんにおこなわれることが多かった。ただし、矢吹「郷土誌」によれば、

婚礼の期日は、大安日と称すべき日を定めて之を行ふ。不定日仏滅其他古来の習慣によりて種々不吉の日ありて（葬礼にも之れあり）、此の日は決して行はざるを常とす。然れども学科上の知識の啓発教育進歩歴史記載の改善等により、如上じょうじょうの期日漸く改まりつ、あるを見る。（読みやすいように句読点を加えてある。以下の引用も同じ）

とあり、かつては「結婚式」には忌むべき日があったことをうかがわせる。

さて、当日の早朝、花嫁の支度は髪を結むすいあげることからはじまる。地毛で烏田（未婚の女性・婚礼の髪の結い方）に結うため、これには大変な時間がかかるものだったという。町の床屋さんにいたり、あるいは床屋さんが実家に来てくれたりしたが、日ののぼる前からはじめて、仕上がるのはお昼近くになったという。それがすむと裾模様すそもようのある花嫁衣裳を着付ける。花嫁の実家では、その間、婚家の一行を迎える準備をしている。

一方、婚家では、祝宴の準備が進む中、午後一時ごろに「ヨメムカエ」に出発する。ヨメムカエの一行は、ゲンザンサマ・ゴシナンサマ・ムコサマで構成され、それにウマカタとタンスカツギが従う。ゲンザンとは、血縁の近い伯父（叔父）などで、親戚の中でも格がある人たちである。ゴシナンサマは夫婦そろって行く。ウマカタとは、結婚していない子どもで、タンスカツギは、近所の青年たちである。道中、沿道の人たちにも酒をふるまい、歌いながら、ほろ酔い加減にぎやかにやってくる。

三神『郷土誌』には、この一行がどのようなものを持参するのかが描かれているので、引用する。

婚儀の当日は小袖一組帯一筋羽織何枚などというが如く、数品（縁起を取りて奇数を用ゆ）其他家内福喜多留二樽（柳樽に酒一升づ、入れる）包物五箇即ち熨斗、白髪、末廣の如きもの其の包方は古式（小笠原流？）による。其他目録（遠方と縁組の場合は親類書も加ふ）又畳返とて男帯女帯に男給女給も添へ更に祝金（富貴に依り差額あり標準拾巴位）米（糯梗一斗宛）肴（塩鮭）を媒酌人が持参する。

このように媒酌人、すなわちゴシナンサマは、実に多くの品物を持参したことがわかる。もちろん、両家の経済状態が反映されることであろうが、縁起をかついで奇数の品数、おそらく三品、五品、七品のいずれかに数をそろえた品物と、酒、熨斗などの縁起物、目録、祝金、米、塩鮭、畳返料（祝儀のために畳がえなどの散財をさせてしまうので、その費用を「畳返料」とした）など、たくさん品の品物を持って嫁の家へ向かっている。

さて、この一行が到着すると、花嫁の実家では、祝宴がはじまる。床の間に背にして、新郎新婦とゴシナンサマが座る。二人の前には飾り物がある。これはやや大きな目の盆に、米を一升山盛りにし、その上にダイコンなどでつくった鶴亀と、松竹梅の枝を飾ったものである。

そして、床の間の前で三々九度の儀式をおこなった後、祝宴となる。三々九度の際に、杯さかづきに酒を注ぐ子どもをサケツギという。これはまだ幼い男女の子どもにやらせる。新郎新婦は隣り合って座り、その隣にゴシナンサマが座る。このとき新郎新婦は現在と同じように床の間を背にした上座である。



【写真1】祝宴の飾り物（提供 小針弥恵子）

三々九度の式をおこなう新郎新婦の前に飾られている松竹梅などの枝。なお、この写真では新郎新婦がゴシナンサマの両脇に座っているが、話者によっては、この逆をいう場合もあり、定かではない

三神「郷土誌」にはより詳しい記述がみえる。

呉方の家にては、媒酌人の一行来るを待ち受け、到着すれば座敷に招じ、茶を饗し落着とて麵類等を饗し、それから持参した諸物品の受渡が済んで酒宴となる。まづ冷酒を饗す、(列席者媒酌人夫婦婿嫁呉方の本家(主人代理か)次に烟酒となる。

宴終る頃を見計ひ木杯三ツ組を媒酌人其他列席員一同飲み廻し媒酌人に戻り最後に其の家の主人に納杯として之を納める。冷酒を酌み交す際謡曲二回を奏す(處高砂・四波海の類)。七、五、三の木杯にて酒宴終り本膳が出て飯となり式終る。

まず、「落着」と称して麵類などを出すという習俗が確認できる。その後、持参した品物を受け渡した後、酒宴となり、列席者と両家の人々が杯を交わす儀礼がおこなわれている。

やがて、こうした儀式が滞りなく終了し、日が暮れて空が「スズメ」色に染まるころに、いよいよ花嫁が出発する。花嫁と両親は「お世話になりました」「つとめろよ」などといった内容のあいさつを交わし、それがすむと縁側では謡がはじまる。これはだれがやると決まっているわけではなく、上手な人が朗々と歌いはじめる。「謡を歌わぬうちは嫁様くれらんね」といわれ、これを歌わぬうちは花嫁一行は出発できなかった。

花嫁をつれた一行は、提灯をともしながら婚家まで歩いていくのが一般的である。ただし、遠い場合や時間がかかりすぎるような場合には乗用車がいられることもあった。また、ナカヤド(中宿)といって、一休みするための中継地点が設けられるときもあった。ただし、こういった家(または場所)がこれにあたるのかについては不明である。婿方では、謡を歌って嫁を迎える。

新郎新婦が婚家に来てきたとき、人々(青年たちなど)は輪切りにしたダイコンを二人にぶつける。さらに、その後軒下(ハンドメ)で花嫁に傘をかぶせ、薫束を交互に投げあう。こうした儀式は、縁側などでおこなわれたが、花嫁は玄関からあがったという人が多い。

婚家でも同様に三々九度の儀式の後、祝宴となる。祝宴は夜遅くまで続くが、新郎新婦は初夜を迎える。ただし、ゴシナンサ



【写真3】花嫁の門入り（提供 小針弥恵子）  
花嫁に笠を被せる。そして、それを越すように薬束を三回投げあう。投げあっているのは近所の人たち



【写真2】花嫁の門入り（提供 星信之助）  
花嫁に笠を被せる（この写真では帽子で代用）

マを見送ってから初夜となる場合（矢吹）と、ゴシナンサマが一緒に泊まる（四人でねる）という場合（原宿など）、泊まるのはゴシナンオッカアだけで、花嫁はゴシナンオッカアと一緒にねる（大和久）などと定かではない。

三神「郷土誌」には、婚家での祝宴の様子についての詳しい記述がある。

取方の家にては一行無事来るを待ち、近迎と称して手伝の青年等途中まで出迎ふ。嫁家に入る際は仮木戸につくり笠をかぶせ杖を投げかける、次に着席より落付に至るまで呉祝儀の宴と異ならず、酒宴は冷酒出で（見参は席をはづす）媒酌人兩人取方より主婦本家出で招伴をする。此の時の酒つぎは小兒（男女）がなす。この際謡曲二回を奏すること前に全じ。燗酒となるや取方の伯叔父等出で招伴し最後に三組の酒杯で七合人の酒杯を主人に納める。この際謡曲を奏す（難波津に咲くやこの花：類）次而本膳・茶となり式を終り呉方の新客は帰る。この際草鞋酒と称して別杯を酌み交し婿は門送り（かど）をなす。新客に酒豪あれば夜をかけて其夜はあけ……（以下、略）

まず、ヨメムカエ一行に加わらなかつた青年たちが、「チカムカエ（近迎）」といって、途中まで出迎えに行く様子がわかる。さらに、婚家でとりおこなう三々九度の儀式ではゲンザンが外れ、本家の人間が加わるといふ先にとりおこなってきた嫁の実家での式とは方法も異なっている。また、どちらでおこなう酒宴もはじめは冷酒、のち燗酒となることが明記されていることは興味深い。

儀式に用いられるのは冷酒、心の壁をとり払ってつきあうときには燗酒と、分析することができるとすれば、「温度」の問題は、民俗習俗を考える上で、大切な要素で

あることを示唆しているといえるかもしれない。そして披露宴は、本人たちが姿を消しても、お酒が好きな人がいればいつまでも帰ることはなく、夜更けまで続くこともあったという。

なお、「三神『郷土誌』」の場合、婿は、嫁の実家からやってきた客に対しておこなわれる「門送り」や「仮木戸」がつくられて嫁はそこからはいるなど、今日では聞くことができなかった習俗の存在もうかがうことができる。

結婚式、披露宴は終わっても、婚礼の儀式はまだ終わらない。

翌日は「フタツメ」といい、花嫁が実家へ里帰りをする。とはいっても、朝起きてすぐに出発というわけではない。翌日の花嫁は忙しい。まず、前夜の後片づけをしなければならぬ。まだ頭は油でかためられた島田のままなのでとても重い。食器を洗ったりするのは大変な作業だったという。それが終われば、髪を洗って丸髷まるまげに結び直す。この洗髪も、なかなか油が落ちず大変なのだという。やがて仕度が整って、実家へ里帰りをする。ポタモチ（「マルメのポタモチ」などという）をつくって重箱に詰め、それを持ってシユートトツサン（舅）につれられていく。このときには持ってきた着物の中でも一番よいものを着ていく。これは、周辺の人たちに花嫁をみせるためだという。嫁の実家ではこれを迎えて膳をふるまう、これをモチブルマイという（原宿など）。嫁の伯母（叔母）たちが婚家に招かれ、蕎麦そばをふるまわれることもある。婚家では蕎麦を打って待っており、これもオチツキツバという（矢吹）。

さらにその翌日、結婚式三日目は「ミツメ」という近所の女性たちを招いて小宴が開かれる。これをアトブルメーまたは、女ブルメーという（原宿など）。

これで結婚式は一応終了であるが、初正月には夫婦そろって親戚にあいさつ回りをしなければならない。近所回りのあいさつはおこなう場合とおこなわない場合があるようだ。

フタツメやミツメについては、話者からの情報と三神『郷土誌』にある内容とで、やや様子が異なっている部分がある。

第二日目は早朝牡丹餅をつくりて振舞ふ。能く「ネバリツク」と云ふ縁起を取りしによるならん。更に蕎麦を打ち出来上れば媒酌人婿

嫁近親にて酒宴を張る。此の酒宴には呉方の家近親縁者（女）招待されて席に列する。蕎麦の饗応は傍に寄ると云ふ縁起をとりしならん。この酒宴は薄暮にいたりてやみ来客手伝等の者帰り、その夜始めて婿嫁合衾す。婿嫁は媒酌人帰宅に際しては両人門送りをなす。

第三日目は別に饗宴を開かず、慰勞の意味に於て媒酌人を招き馳走す。嫁（婿）は三ツ目と称しこの日里帰りをなす。取方の父親が行す。通例は宿泊しないが遠方の場合は宿泊す。この時は一泊せず二泊するを常とす。そして此の時呉方・父親が嫁（婿）を送り来る、宿泊せず。

二日目は婚家で酒宴があり、前日の祝宴には加わらなかつた嫁の女性の近親者が招待され、婚家では、これを餅や蕎麦でもてなす。この酒宴は夕方には終了し、これがすむと近所から手伝いに来ていた人たちも帰宅する。その後、新郎新婦ははじめて同衾するとある。つまり、話者らより古い時代には、結婚式当日ではなく翌日、つまりフタツメに初夜を迎えたことになる。そして、ミツメで双方の父親に送迎されて花嫁は里帰りをしている。このように、酒宴の有無はともかく、話者らの時代すなわち昭和にはいつてからは、日程に変化（短縮）がみられる。

#### 接待など

ところで、自宅で結婚式をおこなう場合の料理は、料理の上手な人二、三人に頼んでつくってもらう。彼らをイタノマという。祝いの膳や引き物（その内容については第一章衣食住参照）は、招待客の格式によって品数が異なる。ゲンザンは最も格式が高く、品数も七品を最高にほかの客とは大きく差をつける。さらに、その下のオオバン（ゲンザンではない親戚など）、ノツペ（一般の客）とはまた差をつける。また、婿方の引き物は嫁方よりも品数を多くするなどの差をつけることもあった。このように、親戚の中での序列が顕著となる結婚式では、この順番を巡ってしばしばいい争いになることは珍しいことではなかった。さらに、酒がはいって酔いが回っていることもあり、場合によっては取っ組みあいの喧嘩になることもあったという。

また、婚礼に大金をかけることに対する批判というのは、古今同じようで、三神『郷土誌』では、その筆者が婚姻の風習について苦言を呈している様子が見える。

(婚姻は) 人物本位に依る。婚姻に重きを置くこと僅少にして親族結婚の弊風未だ去りぬべくもなく、物貨本位の風あり。為に大額の費用を要し、負債するもの等あり。而して調度品を披露し以って誇を感ずるが如き悪風あり。(補足は筆者)

「親族結婚」について「弊風未だ去りぬ」と述べているように、当時の結婚がいかに血縁の中でおこなわれていたかがうかがえるだろう。また、婚礼のために借金をすることもあったようである。箒箆たふすを一棹さお持たせたとしても、引き出しの中にはたくさん衣装が詰まっていなければ格好がつかない。収納家具としての「箒箆」だけを運べばよいというものではないのである。むしろ、中にながどれだけ詰まっているかが重要な意味を持つ。福島県内でも、結婚式の日などに近所の女性たちを招待して簡単な宴をもうけ、嫁入り道具や着物などを披露するという習慣がみられる。話こそ聞くことができなかつたものの、矢吹町にもかつては、こうした習慣があつたことをうかがうことができるだろう。

このような自宅での結婚式は、葬儀と同様、近所の人たちの手を借りなければ準備ができない。やがて、経済の発展に伴い日本の産業構造が変化する中で、こうした人手を確保することは困難になっていく。やがて結婚式は、次第に公民館や料亭、結婚式場などでおこなわれるようになり、両家が互いを往き来しつつ時間をかけておこなうものではなく、一か所に集まって短時間にとりおこなう形式へと変容を遂げ、現在にいたつている。

### 三 嫁の仕事

嫁いでまもなくのころは、どこにいたらよいのかわからず困ることも多かつたという。嫁の立場は低く、家族全員の仕事は大変な氣を遣つた。また、家事をはじめとして農作業など、朝早くから夜遅くまで働かなければならなかつた。

朝の四時ごろには起きて働き出す。広い農家では掃除が大変だつた。廊下を雑巾がけするのはもちろんのこと、オビドおびどがけといつてオビド(帯戸)を磨くのも嫁の仕事だつた。稲刈りの時期などは、ヨガリ(日没後)も稲刈りを続ける(もやら)された。

戦争中、夫が出征しゅつせいしているときにはその分も働かねばならず、休む間もなかったという。後述するように、子どもを生んでもなく働かされて体を壊すケースもあったほどである。

そうした彼女たちが楽しみにしていたのは、ヨメサマテヤスミ（嫁様手休み）とよんだ休息日である。一日、八日、十五日、二十四日はカミゴトといい、この日は午前中だけ農作業する日とされた（三城目）。村の青年たちが学校で太鼓をたたいて、仕事の終了を知らせる。さらに、青年たちは違反者がいないかどうか巡回をおこなう。これに反して仕事を続けると制裁を受けかねないので、「休むしかない」のであった。「見回りをしてくれたから、休むこともできた」と話す話者もいたほどであるから、この日の休みは貴重だったのであろう。しかしその日は、逆にさらに朝早く起きて作業をしていなければならなかったともいう。また、盆や正月、寺社の祭日、節句など、里帰りをするときには、その分先どりして仕事を終わらせておかなければならなかった。たとえば、馬のための草刈りは、二晩分すませてからでなければ帰れない。この草刈りは、山の草を一人あたり三把刈さんわってこなければならなかったが、山での作業は大変きつく、そう簡単には終らせることができなかった。

「農家の嫁は使用人同然だった」とは、多くの人が語ってくれた言葉である。

#### 四 三城目の水祝

前項において婚禮の次第について述べたが、これは嫁入りの場合である。一人娘に婿をとるなどという場合には、嫁と婿の家の立場が逆になるだけで大きな差はない。

ただし、「婿に出す」場合、三城目は「水あびせがあるから、三城目には、婿にださねえ」などといわれることがあった。

「水祝儀」などといわれるこの習俗は、全国各地に今日でもわずかに残り継承されている。新婚の男性が、裸または、それに近い格好で、真冬に冷水を浴びせられる「婿いじめ」といわれる習俗である。しかし、これは厄を払うと同時に、地域社会の中

で一人前の男として認められるための試練の儀式であった。

三城目の「水祝」のことは、三神『郷土誌』にも特別に項目を設けて記載されている。

全国稀に見る水祝なるものあり。大字三城目の宿中に於て行はる。即ち其年内の当部落中に於ける花婿全部にて旧正月十一日に拾一枚に素草鞋もて部落全戸に新年の御慶を述べ歩き、更に十四日夜上下両町より青年使者二名づつ、を各上下両町の宿に派し各々其の年の宿所・花婿人名・忌服・他行、病氣等の状況を述べて小笠原式の儀礼に則り礼儀丁重に一寸の過も許さず之が為に夜明けて次の日に及ぶことさへあり。而して十五日は上下両町の花婿一斉に凜然たる寒さのうちに氷片交りの冷水を古婿手伝人に依りて「サシコ」一枚素草鞋なる姿に浴せられ終つて鎮守御霊神社に参詣す。此の日其の状景誠に勇壯にして全国に稀なる為に遠近より観集<sup>ミヤビ</sup>来りて賑に其の数千を越ゆるの狀態なり。

これを読んだだけでも、「婿に出すな」と人々がささやきあう理由を想像するに難くはない。

現在では、おこなわれていない祭りなので残念ながらみることができない。しかし、前掲の三神『郷土誌』や、相楽真一氏がまとめられた貴重な資料(『三城目水祝』『役場の思い出 百年桜 宵籠 第二集』)が残されている。こうした資料を引用させていたがながら、水祝についてみていこう。

起源は古く、鎌倉権五郎景政の遺言ではじめられたという伝説が残されている。相楽氏によれば、「(景政が)勇ましい行事をやってくれといわれてはじめて」と氏の祖父が語っていたという。

この祭りの中心となるのは、その前年中に結婚式をあげた花婿または、前年中に三城目に転入してきた夫婦の夫である。後者は年齢など関係なかったらしく、老夫婦などの場合には大変なことであったという。彼らが、上と下とにわかれておこなわれていく。

水祝は、正月十一日の早朝からはじまる。上下の花婿たち全員で御霊神社に詣で、祭りの無事を祈願した後、「婿年始」に出発する。これは、三神『郷土誌』にもあるように、三城目全戸(三五〇戸程度)を巡って「新年の御慶を述べ歩く」というもの

である。薄着に素足という恰好で雪が降り、ときには風も吹く中を巡るのだから、その辛さは大変なものであったようだ。相楽氏によれば、凍りついた雪で足を切り、草履を血で染めたこともあったという。一戸でもまわり残しがあると、あとから「使者」とよばれる自分たちより年少の者がいじめられることになるため、決して手を抜いたりはしなかったのだという。

「婿年始」がすむと、翌十二日から「水祝」の準備にはいる。とはいっても、たいていの準備は「古婿」とよばれる前年の「花婿」が準備してくれるので、さしあたって「花婿」たちは、「使者」と「宿」を探す作業にかかる。「使者」は、かみあい（上合）としもあい（下合）それぞれ正副二名をたてる。未婚の男子（現在の高校生ぐらいの年齢）に依頼するのだが、これはいわゆる「いじめられ役」なので、なかなか引き受け手がなく、探すのに苦労したという。相楽氏によれば、この時期になると使者を依頼されるのを嫌がって、三城目の男の子たちは須賀川の映画館に逃げこんでしまったこともあったという。使者はその後、「花婿」たちから、口上や礼儀作法などを詳しく指導される。「宿」は上と下でそれぞれ探すが、「水祝の宿を貸すと火元にならない」といわれたので比較的借りやすかったという。宿では、土間に近所から集められるだけの風呂桶（体を温めるため）を用意したり、また家を泥だらけにされたりするなど、大変な負担となったのだが、それでも快く貸してくれたものらしい。使者の指導も含めて、こうした準備は十三日までおこなわれた。

十四日は、双方の宿へ使者がたつ。十四日の日が暮れると、上と下とが敵同士となる。境界には見張りの者たちが立ち、にらみあう。それぞれに相手方の領域に立ちいったものは、「とりこ」にされ宿に留置される。そして、「使者」の務めが終るまで家へは帰してもらえない。双方に緊張感が漂い、ときには喧嘩になることもあったという。

日付がかわると、いよいよ「使者」が相手方の宿へと出発する。「使者」は、「婿年始」のときの「花婿」と同じように、みどしに裕、素足である。境界で見張りをする者たちもこの姿をみて「使者」とわかるので、侵入者として制止することはない。

さて、宿へ着いた使者は、大声で来訪を告げるが、そう簡単には返事もしてもらえない。数回玄関先で来訪を叫んだ後、ようやく宿にあげてもらおう。このとき逃げ出さないようにと、提灯と下駄はとりあげられてしまうのだそう。そして、中老とよ

ばれる三〇―五〇歳ぐらいの男たちが部屋いっぱい（相楽氏によれば、八〇人とある）に待機している中へとおされる。宿では中老たちに酒がふるまわれる。使者がやってくるころには当然、相当にできあがつていたらしい。彼らは、「使者」の粗相を微塵も見逃すまいと、二人の少年たちをにらみつけている。宿の主人にあいさつをした後、上座にとおされお茶の接待を受ける。しかし、これはお茶ではなく冷水である。「使者」いじめのはじまりである。よく冷えたお水を飲まされた後は、ハンドメ（雨戸）が開け放たれ、使者が外にいる人たちにも公開される。当然、寒風が部屋の中に吹きこんでくるから、菌もかみあわないような寒さにさらされることになる。

口上は「正使」が述べ、「副使」はその手助け（忘れてしまったとき、こっそり教えるなど）をする。内容は、以下のとおり。

・ 自己紹介（正副兩名を正使が述べる）

・ 宿の儀

・ 花婿の儀

・ 古婿の儀

・ インミ（忌身）の儀（不幸があつて正月を迎えられない家）

・ 他行の儀（他所へ出ている者）

自己紹介や宿についてはともかく、数十名といる花婿、古婿、さまざまな事情の家について、一つの間違いや欠落なく言上しなければならぬ。冷水を飲まされたあげく寒風にさらされ、酒で殺氣立っているような男たちを前にして、少年がこれを成し遂げることがどれだけ難しいことか、察するに難くないだろう。間違ったり、抜けたりするとすかさず指摘される。それに対してお詫びをいっても、許してはくれないのだそうだ。「お帰り願いたい」とまでいわれることもあり、そのときは再び上下の境界まで戻ってきて状況を報告し、リベンジに向かう。もちろん、あいさつからはじまって自己紹介等々、はじめからすべてやり直しである。そして、また言上に失敗すれば、「帰れ」といわれてはじめてからやり直した。しかも、「婿年始」の際に、どこか

の家を飛ばしてしまったり、こっそり袷の中を下着などをつけていたりするなどの粗相があれば、それについても糾弾される。深夜の一二時ごろからはじまってこの儀礼が終了するのは早朝六時ごろで、ときには、朝の八時ごろまでかかることもあったという。三神「郷土誌」に「礼儀丁重に一寸の過も許さず、之が為<sup>あやまち</sup>に夜明けて次の日に及ぶことさへあり」とあるが、これも決して誇大表現ではなく、相楽氏の記憶では、古婚の所屬を巡っていい争いとなり、日が高くなっても終らなかつたことがあるという。

結局、「水祝」そのものが夜になってしまったというから、「使者」の儀式はかなり厳重におこなわれたものと推察される。

これが終ると、いよいよ「水祝」本番である。

上は赤を、下は白の幟<sup>のぼり</sup>をあげて、「使者」がすんだことと、「水祝」開始を見物人に知らせる。

宿では、「花婿」「古婚」「水をかける人」「花婿の身内（花婿を応援する役割を持つ身内の者）」などがあふれている。「水祝」のときには、サシモノという古い布を縫いあわせたかたい着物に荒縄を帯のかわりにして結ぶ。仕度が整つたら、駆け足で神社へ向かう。沿道には見物人に混じって、「花婿」を案じる嫁の姿もあった。神社での祈願がすむと再び宿へ戻る。

こうして準備が完了すると、いっせいに「古婚」たちが水をかぶる。その中の一人が御神体（手杵に円座を被せ蓑を着せたもの）を抱き、ほかの「古婚」たちに囲まれ、先頭の者が引く綱に、引つ張られて宿を出発する。人々は、目の前を通過していく「古婚」たちに容赦なく水をかける。この水は、堀を堰きとめてその中に雪や氷をいれ、いっそう冷たくしたものである。そして、宿から上、下の境界あたりまでくるころには、御神体を抱いた「古婚」一人になってしまふという。それでも必死になって戻ってくる。いきよりも帰りの方が酷く荒つぽい水のかけられ方をするのだという。以上で「古婚」の「水祝」は終り、いよいよ「花婿」の「水祝」である。

「花婿」は、くじ引きで順番に一人ずつ水を浴びて宿を出る。うつ伏せにさせられた「花婿」は、足元の前に、頭を後ろにして抱きかかえられる。前の足の方は、嫁方の兄弟などが、頭は自分の兄弟や伯父（叔父）たちが持つ。そして、その周りを親戚

や友人らがかばい、「花婿」に水がかからないように守るのである。他村の者は、この祭りに参加することはできないため、他村から嫁をもたらった場合や、他村から婿にきた場合などは、その分かばってくれる者が少なくなる。応援してくれる者が少ないと解釈されて、外聞が悪いのだという。宿を出た「花婿」は、こうした人々に守られながら、境界までやってきて宿へ戻る。だが、かばってくれる者たちは途中から一人減り二人減りと姿を消し、最後まで一緒に戻ってくれるのは本当に近い身内だけとなる。それでも、なんとか「花婿」をかばいながら、宿まで戻ってくる。

やがて、上下両方の「水祝」が終了すると、それぞれ「使者」が再び宿を訪れ、無事終ったことを報告する。このとき、「古婿」が抱えていた御神体を落したり捨てたりすると、また「使者」がはじめられる。

「使者」が帰ってくるまでの間に、全員が着がえて「使者」の帰りを待つ。やがて「使者」が戻れば、宿主と全員で御霊神社へ参拝し、「水祝」は終了である。このとき、宿主は顔に煤すすを塗り顔を汚して、参拝の列に加わる。

三城目の「水祝」は、「花婿」や「古婿」たちだけではなく、集落の幼少の者や高齢の者を除いた男たち全てが水を浴びるのとなっているのがわかる。むしろ、中心となる「花婿」よりも、その「花婿」をかばう役目をする近親者や友人の方が、水を浴びるのではないかと思われるほどだ。「水祝」を逃げたり、参加しなかつたりした者は、一生笑いや友人らの方だ。従って三城目の男の子たちは、小学校を卒業するころから「水祝」に参加して体を鍛え、その日に備えた。

冒頭に「水あびせがあるから、三城目には、婿にださねえ」と述べたが、女の子たちにとっては、「嫁にいくなら三城目」ということであった。勇壮ゆうさうな祭りに参加する三城目の男たちは、女の子のあこがれだったようである。

しかし、こうした行事も戦争の影響で廃たれていった。酒が手にはいらないうこと、男たちが徴兵されて居ないことなどが大きな原因だ。戦争が激しさを増すとともに次第に簡素化され、やがて三城目の「水祝」は、昭和十八年を最後に姿を消したが、昭和二十二年に一時復活したものの再度途絶えた。

## 第二節 産 育

少子化の進む今日には、まさにうらやましいかぎりであるが、第二次世界大戦前後ごろまでは、兄弟が一〇人などということも珍しくはなかった。ただ、そのことは乳幼児や妊産婦の死亡率も高かったことを示唆する。もちろん、今日のように医療技術、制度、設備が満足ではなかった時代のことであり、また「お産は病気ではない」と医師に受診することさえ珍しいことだったので、それもやむを得ないことだった。もともと、今日ですら女性が生死をかけて臨む大事である。また、無事に生れても、子どもの成長にはさまざまな不安がつきまとう。常に「死」がそばにある不安定な状態をなんとかのりこえていくために、うみ出された知恵、習俗こそが、「生きるための方法」であったのかもしれない。

### 一 子どもを産む

#### 出 産

妊娠には自分で気がつくことが多かった。妊娠がわかると、夫や実家の母親などに知らせる。その後、サンバサン（産婆）に診てもらい予定日などを教えてもらった。五か月目の戌の日などには、実家の母親が腹帯と麻を持って迎えにくる。それからサンバサンの所へいって腹帯を巻いてもらった。腹帯は、サラシ（晒し）である。長さは、半反、七尺五寸三分、一反などさまざまである。しかし、必ずしもこのようにサンバサンに診てもらったわけではなく、中には陣痛が起きるまで腹帯も巻かず、またサンバサンにカカル（診てもらう）こともなかったというケースもある。さらに、妊娠しても恥ずかしくて隠していたというケースも少なくない。これは、特に何度も妊娠したようなときには顕著である。

妊娠中は、全国各地でさまざまな禁忌・俗信がみられる。矢吹町でも、

・ ウサギの肉を食べるとミツクチの子が生れる。

・ 火事または葬式（あるいは死人）をみてはいけない。みるときは鏡を懐ふところにいれること。

・ 葬式の手伝いをしない（夫も手伝ってはいけない。特にロクシヤクをしてはならないという）。

・ 墓へいかない。

・ 便所を掃除するとかわいい子、きれいな子が生れる。

といったものがあつた。

明治時代の中ごろまでは、いわゆるトリアゲババ（とりあげ婆）などとよばれる近所の助産の上手な老女などによって、助産がおこなわれることが多かった。ところが、明治三十二年の「産婆規則」の公布により、産婆に関する規制が全国的に統一されることとなる。これにより、産婆は国家資格となり、国家試験の合格者に正規の産婆としての開業が許可されることになった。明治三十八年には、福島市に県立産婆看護婦養成所が開設され、福島県でも本格的な産婆養成がはじまった。その結果、大正時代のはじめには、過半数の産婆が有資格者となったという。つまり、町史編纂のためにご協力いただいた話者は、こうした助産体制がある程度整った時代に生れ、育ち、そして子どもを産んだ方々である。従つて、矢吹町の妊娠・出産における禁忌には、次のような医学的な根拠に基づくと思われるものが多い。

- ・ 柿の木の下をとったり実を食べたりすると体が冷えるのでいけない。
- ・ 体を冷やさない。
- ・ 病気ではないのでなるべく動く。
- ・ 動物に近寄らない。
- ・ タバコをすわない。
- ・ 刺激のあるものを食べない。

- ・ 跳とんだり跳はねたりしない。
- ・ 旅行をしない。
- ・ 酒を飲まない。
- ・ かかとの高い靴をはかない。
- ・ 背伸びをしない。
- ・ 油ものを食べない。
- ・ カルシウム・たんばく質を多くとる。
- ・ ユワシ（鰯）や煮干を食べるといい。
- ・ 鯉こいを食べると乳がよく出る。

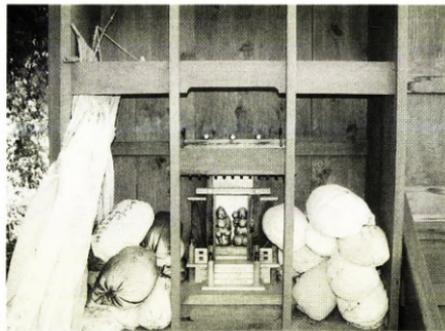
あるいは、「特にない」という回答も多かった。さらに、昭和の戦後、またはその直前に生れた人たちのころになると、「音楽を聴く」「お腹に話しかける」など、さらに胎児を意識したものも聞かれるようになってくる。いわゆる「俗信」や「民俗知識」が聞かれなくなり、かわって医学的な根拠に基づく知識が多くなっていくことは、産婦やその周囲の人たちの意識が「病氣じゃないんだから医者になどかからない」というものから、「生死にかかわることだから医師を頼る」というものへと変化したことを物語っているだろう。

妊娠や出産においては、やはり「神頼み」という一面があることは現在でもかわりはない。

### 安産祈願

矢吹町内にも安産祈願の痕跡あとはいくつか残されている。

まず、新町の大山祇神社には、オマクラを奉納するかたちの安産祈願が残っている。大山祇神社の堂のかたわらに小さな社やしろがあり、そこに恵比寿・大黒が祀まつられている。その両側に直径五〜八センチ、長さ一五センチ程度の運動会の紅白玉いれで使用する玉のようなものが積み重ねられている。それがオマクラで、生れる前に一つ借り受けてい



【写真4】大山祇神社（矢吹・新町）のオマクラ  
「平成十二年十一月十四日生」の文字がみえる。比較的最近奉納されたものだ。なお、さらにこの裏には十九夜講や如意輪観音の石塔もいくつか残されている



【写真5】正福寺（中畑・原宿）薬師堂  
正福寺薬師堂内：懐に子どもを抱くコヤササマ

き、無事に生れたら倍にしてまた奉納するのである。決まっているわけではないが、男の子なら白、女の子なら赤を奉納するのが一般的だ。こうした安産祈願の方法は、浜通りでは盛んにおこなわれているが、矢吹町周辺ではあまりみられないものである。次に、中畑原宿にある正福寺薬師堂に祀られるヤクシサマがある。正福寺の門をはいってすぐの桜の木のかたわらにあるお堂の中に、不動明王とともに祀られている。この地域の人たちが「子安講」で祀っているもので、高さは五〇センチくらい。彩色もされてはいるが、ところどころ剥げ落ちてしまっている。この像は、懐に子どもを抱いているのが特徴である。

子安講の祭日は一月と十一月で、ヤドマワリで当番を決めて準備をし、お寺でオモチをついて和尚さんがそれをまく。子どもたちはそれを拾った。講の構成員は「お嫁さん」である。その家の跡とりに嫁がくるまでこの講に参加する。安産祈願は、妊娠している人がロウソクをもらってきて、お産がはじまったら火をつけて拝むというものである。なお、後述する本章第三節葬送においてふれるように、この地域では、葬列のソイクチが持つロクジゾーのロウソクをもらってきて、同様に灯すという信仰もある。

また、三城目には、周辺の女性たちが信仰していたという山の神があった。「ナセナクテ（産めなくて）大変だ」というときに、お姑さんが、隣の家から馬のタテゴを借りてくる。そして、それを借りて山の神の所へいき、拝むとナセル（産むことができる）という。しかし、残念ながらその山の神がどこにあるのか、確認することはできなかった。

また子授けの信仰もあった。須乗新田には「抱き地藏（子抱き観音・抱き子安などともいう）」がある。これは周辺の二〇数戸の家の女性たちによって祀られている。現在でも冬の暇な時期に集まって、皆で遊んだりするなどという子安講がおこなわれている。特に、三月の第二日曜日（もとは三月十七日）にはゴエンニチ（子安講）があり、水色の幟が立つ。幟は、



【写真7】子抱き地藏の胸元

胸元に抱かれる子どもの大きさは親指ぐらい。地藏の胸がくりぬかれていて、そこにはまっているだけなので、とり外しは簡単にできる



【写真6】子抱き地藏

(須乗新田子安観音堂内)

子どもを授かった人たちが奉納したものである。ゴエンニチには、周辺の若妻たちが料理などを持ちよつた。また紅白の饅頭をつくり、オミキセンをあげていった人には、オグフと饅頭を渡す。ここには、写真6のような像が安置されているが、これは、一度紛失したことがあり、数

年前にある人がつくって奉納し直したものである。

胸に抱かれる小さな子どもは、とり外すことができない。子どもが授からない女性はこれを借り受けていって、胸に抱きながらねるのだという。そして、子どもを授かるともう一体、紙粘土などでつくってお返しする。安産と子育ての神様で、「この部落に子持たずという人はいない。よそへ（お嫁に）いっても、子どもを産まなかった人はいない」のだそうである。しかし、「子抱きにならなかった（妊娠しなかった）人はうらんで返さない」こともあったという。また、この子抱き地藏が祀られている堂の前には、男根をかたどった二十三夜の石塔が建っており、これに触れると子どもができるともいわれ、これをお参りした後に、子抱き地藏から子どもを借り受けることになっている。



【写真8】須乗新田 子安観音堂

手前にあるのが、男根をかたどった二十三夜塔。道路から20メートルぐらい離れた所にある

矢吹町内ではないが、安産祈願に訪れることが多かったのは、石川町大字新屋敷の「安産地藏」である。もともとは、女性の安産を祈願して土中入定した僧を祀っているものだが、安置されている身長一メートルほどの地藏が祈願の対象となっている。地藏の台座のあたりには、直径一五センチ程度程度の穴が開いている。これは、この地藏を削った粉を飲めば安産するという言い伝えがあり、多くの女性たちが祈願に訪れた際に、削りとっていったためである。また、祈願の際には、よだれかけを借りていき、無事に出産がすむと倍にして返す。

そのほか、最近ではいわき市の赤井嶽薬師へ参る人もいた。

一方、いつの時代も、望まない妊娠というのがある。特に子沢山だった場合などは、「また、ナスのか」といわれて恥ずかしかつたという話を聞くことが多い。とはいっても、今日のように中絶が安全におこなわれることが難しかった時代のものであり、また違法な中絶は、刑罰の対象となることもあり、女性たちにとって中絶は、出産と同様に命がけのことだった。そこで、望まない妊娠をした女性たちは、ハンサン（流産）するように試みるが多かった。「イカの黒焼きが効く」、「ホオズキの根を使う」というような、どのようにそれを用いるのかはつきりしない伝承もあるが、最も多かったのは、高いところから飛び降りてみるとか、川や堀（野菜を洗ったり米をといだりするために家の周囲に巡らされた水路）を、飛びこえてみるなどという物理的な行為であった。

昭和三十年代ごろからは、病院などでの分娩が増えてくるが、それまでは自宅分娩が主流であった。初産のときには実家で産むことが多いので、陣痛が起きればすぐ座敷で休むこともできたようである。しかし、次子以降は婚家で産むため、農家の場合などは特に、農作業をしているうちに腹部がツツパツキテ（はつてきて）陣痛がきても、ナス（分娩の）直前までは働いていたということも珍しくはなかった。やがて、オユがコボレテ（あるいはハシツテという。破水すること）、いよいよ分娩がはじまる。陣痛の長さや強さは個人差が大きいもの、「障子の棧がみえるうちはまだナサない（痛みで視界がぼんやりしてくるほど強い陣痛が起きなければまだ子どもは生れない）」といわれた。

## 二一 子どもを育てる

## 産

## 後

病院での分娩が増えてくると、つまり医療が介入してくるようになると、伝統的な習俗は次第に簡素化されたり、省略されたりするようになってくる。

かつて自宅での分娩がおこなわれていたときには、後産（胎盤たいばん）はその家の男性（父親や夫などが多い）が、墓へイケテ（埋めて）くるという習慣が全国的にもみられた。「最初にその上を踏んだものを恐れる」などといわれ、さらに「父親が埋めた上を踏んでくる」という地域もある。また、あえて多くの人に踏まれるような所へ埋める地域もある。矢吹町でも、「上にのぼったものを恐れる」「東に背を向けて穴を掘り、埋める」という俗信が聞かれた。サンバサンが新聞紙などに丁寧に包んでその家の男性に渡し、男性はまだ温もりの残る後産を日ののぼらないうちに墓へ埋めてくる。自宅分娩から病院での分娩へと変化する過渡期かどきには、つき添いの人などに後産を渡し、「お墓に埋めてくるように」などと指示することもあったようである。叔母の出産のつき添いで病院につき添っていた、当時高校生ぐらいの年ごろだった女性の話者が、陶器にいれられた後産を渡され、「お墓に埋めてきてください」と指示されたことがあると語ってくれた。温もりの伝わってくる器をしっかりと抱きしめ、バスにのってお墓まで持っていったのだという。病院での分娩に変化したことよって、「後産はお墓に埋める」という習慣は残っていたものの、「男性」という要素が欠落してきたことがうかがえる。そして、ほとんどの産婦が病院で分娩をおこなうようになると、後産は、「病院が処理（処分）するもの」になっていく。

そうした中でも臍帯さいたいいわゆる「ヘソの緒」だけは、桐とうの小箱にいれて保存するという習慣は残った。ヘソの緒についての俗信は全国各地に多く、「子どもが大病をしたときに煎せんじて飲ませる」などということが福島県内でも聞かれることは多い。矢吹町では、ヘソの緒を保存しておく理由について聞かれることはなかったが、それでも「神棚にあげておく」「大切にしまっておく」



【写真9】お湯つかい（提供 後藤助一郎）

「嫁入りのときに本人に渡した」などと長期間にわたって大切に保存しておいた人がほとんどである。「後産」や「ヘソの緒」に含まれる血液を、臍帯血という。造血幹細胞を豊富に蓄えているため、白血病や免疫不全などの治療に用いられるようになってきており、分娩の際に献血もおこなわれるようになってきている。かつては、その子どもの一生に影響を与えるものとして大切にされた「後産」や「ヘソの緒」は、医療技術の発展とともに、その扱いや持つ意味も変化しつつあるようだ。

子どもが生れた後は、さまざまなお祝いの儀式が待っている。

サンバサンは、七日間から十日間家に「お湯つかい」に通ってきてくれる。子どもを沐浴ももよくさせるだけではなく、産婦のスソ（会陰）の手当てなどもしてくる。そして七日目には謝礼をする。料金を支払うだけでなく、お赤飯などをつくって小宴を設けることもある。

また、この七日目はいわゆる「お七夜」で、子どもの名付けなどはこの日におこなわれることが多い。名前は、祖父などが先祖の名前からつけたり、サンバサンにつけても良かったりする。子は祖母に抱かれ、神棚や近くの神社などに詣でることもあった。なお、シツチャイワイ（七夜祝い）とかオボタテという祝いは、お祝いをもらった人たちを招いてふるまう祝宴であるが、これは特に七日目ということにはこだわらないようである。誕生より一年以内であれば、いつでもいいのだという。

オンビ・オビなどといわれる産の忌みの期間は、二十一日間である。この間の食事は大変質素で、たいてい「お粥に梅干（または、焼き塩やカツブシ味噌などのわずかな塩味のもの）」だけである。産の忌みをかたく守る地域、たとえば福島県の太平洋沿岸などでは、産の食事は別火（即席のカマドをつくることもあるが、七輪などを用いること

が多い)でつくることがある。矢吹町でも七輪でお粥かゆを炊いたという話者がいた。煮炊きの火を別にするくらいだから、当然この間は入浴や洗髪などもおこなわない。家事もあまりおこなわなかった。しかし、逆をいえば、その間はなにもしなくてよい、大事にされたということである。産婦は、アドツパラヤメル(出産後、子宮が収縮するときに起こる痛みがひどいこと)こともあったから、なにもすることのない二十一日間は大変ありがたいものだったという。しかし、前節で述べたように、嫁は働かなくてはならなかった。二十一日をすぎないうちに、農作業に借り出され、その後頭痛に悩まされたという人もいた。また、田植え前に生れた子は、「親孝行」ともいわれた。嫁の労働力が、いかに貴重なものであったかをうかがわせる。

お産のお見舞いには「イワシの缶詰」がたいそう喜ばれたが、油ものや柿は食べてはいけないとされた。特に柿は「百日も食うな」といわれてかたく禁じられていた。

母乳が出なくて困ったという話はあまり聞かなかつたが、足りない場合には近所の人にもらったり、オモユをつくって飲ませたりした。戦時中は特にミルクを入手するのが難しかったという。逆に余ってしまう場合には、「壁にぶちまけるようにして」捨てるのだという。その理由は定かではないが、たとえば相馬地方などでは、「ミミズに飲まれると乳が出なくなる」などという言い伝えが聞かれることが多い。

子守は祖父母の仕事であつたが、子守を雇やとつたり年の離れた兄弟がみたりすることも多かつた。また、祖父母と同居しておらず、子守の手がない場合には、田畑や山へ一緒につれていき、藁でつくつたエジコにいでて日陰においておいた。

おんぶもよくおこなわれた。ヨメサマテヤスミ(本章第一節三嫁の仕事参照)のときやカミゴト(第六章第一節参照)の休み日には、嫁は子どもを負ぶつて里帰りしたが、その際には外出用の白のメリンスのオンブオビを使った。普段のおんぶにはモスリンを使用し、子どもを背負つたまま家事などをおこなつていた。

### 宮 参 り

生れてから一か月ぐらいたつて、「宮参り」をする場合がある。祖母に抱かれて母親とともに近くの神社などに参る。特にこの日でなければならぬというようないふだが、男の子三二日、女の子三二日という例

が最も多いようだ。宮参りそのものをおこなわないという人も珍しくはない。家によっては、赤飯などを炊く場合もある。

「宮参り」の後は、新生児の儀礼が続く。

まず、続いておこなわれるのが「食い初め」である。ご飯や味噌汁のほかに、尾頭つきの魚をのせた膳を用意し、川原からきれいな丸い小石を拾ってきてなめさせ、ご飯などを食べさせるまねをする。小石をなめさせるのは、「菌が丈夫になるように」との願いからである。全国的に男子と女子とで日数に差をつけることも多いが、矢吹町では厳密にこれを区別することはなく、ほぼ百日前後のころにおこなわれることが多い。

「初誕生」の祝いでは、子どもに一升餅を背負わせて歩かせ、後ろからやさしく押して転ばせる。嫁の実家などを招待して祝宴を催すこともある。

「初節句」は、男子には鯉のぼり、女子は雛人形を飾って祝うが、こうしたものは嫁の実家から送られることが多い。ただし、こうしたものは戦後になってから盛んに飾られるようになったものであり、かつては、五月節句には柏餅（三城目では、これをシンコマンジユウという）を、三月節句には菱餅（白と緑の二色のもの。緑は、草餅である）をつくって祝う程度だった。

初節句よりも盛大に祝われるのが「初正月」である。祝宴に招待されるのは嫁の実家ぐらいただが、親戚など多くの人たちから、たくさんのお掛け軸を贈られるのがこの地域のならわしである。絵柄は、高砂たかさごや美人画、鶴亀や松に日の出などといった縁起の良いものである。贈られたそれらすべてが、部屋の壁に飾られ、壁は掛け軸で埋め尽くされる。それを年賀に訪れた客などに披露する。

新生児のおこなう儀礼はこれでほぼ終了する。あとは三年、五年、七年を区切りとしておこなわれる七五三の行事があるが、これも戦後になって盛大におこなわれるようになったものであり、それ以前は家内でささやかなお祝いをすることもあったようだが、現在のように盛装せびょうして宮参りするなどということは逆に珍しいことであったようだ。

女子が初潮を迎えたときに赤飯を炊いて祝うことなどはおこなわれたときもあつたようだが、成人式のようなものも特にはな

かった。

年祝いは、男性四二歳、女性三三歳のときにおこなわれることもあったが、最近は四九歳のときに同窓会をかねた宴が催されることが多い。その後は、還暦（六〇歳）、米寿（八八歳）の祝いなどがおこなわれる。還暦の祝いときには、赤いチャンピオンコや頭巾などが贈られていたが、今では米寿の祝いのときに贈られることが多い。また、九のつく年齢になったときには、トシカサネといって厄払いをすることもある。

### 第三節 葬 送

現代は、長寿社会、高齢社会 などといわれている。さらに二〇年ほど後には、超高齢社会 になるのだという。「三〜四人に一人は六五歳以上」という言葉が独り歩きをはじめ、そこに社会保障に対する不安も加わって、まるでこの世の終りともいような騒ぎをしているメディアに出会うことがある。長寿がこれほど喜ばれていない国も珍しいのではないかと思うほどである。人はどのような時代でも不老長寿を願って生きてきた。全国的に「友引」を忌むのも、自分が「引かれて」いくことを恐れるためであらうし、裏返せばそれは「まだ死にたくはない」、つまり長生きをしたいということである。ところが、いざ長生きをする人がたくさん出てくると、社会保障制度が破綻するなど、「長寿社会」に対して不平不満を並べるのだから、なんとも矛盾した身勝手な話である。

それはともかく、戦後五〇年がすぎて物質的にも豊かになり、医療保障の充実もあって、日本は世界でも有数の長寿国となったことは事実だ。そうした中で「死」に対する考え方や価値観も少しずつ多様化してきている。

自宅で死ぬのではなく、病院など自宅「以外の」場所で死ぬ人が多くをしめるようになり、さらに核家族化の進行による世代

間の断絶などもあって、人々にとって「死」は身近なものではなくなってしまった。そうしたことと昨今起きている社会問題とが無関係ではないという指摘も、メディアでは盛んに報じられている。

こうした「死」に対する考え方の変化は、社会問題だけではなく、埋葬方法や祖先祭祀などにも影響を与えている。さまざまな形の墓地や墓石の出現、火葬ののち納骨ではなく、海や山、果ては宇宙にまで散骨をおこなえるようになるなど、「死後」に対する考え方も多様になってきている。葬儀の方法も、かつてのように禁忌にしばられたものではなく、音楽を流したり、踊りを踊ったりと、「個性」を主張するような自由なものになってきている。古来、人は、死ねばその家を守るゴセンゾサンになると考えられていた。つまり「故人」は、年忌ねん忌を経るごとにゴセンゾサンという大きな輪の中にはいり、「個人」ではなくなっていくものだった。しかし今日では、ゴセンゾサンの輪の中にはいる前に、「個人」としての「個性」を尊重して弔う方法にかわってきている。

このような多様化の時代、人が死ぬということはどういうことだったのか、どういう人たちがどのような思いで「死」を扱ったのかをみつめ直すことには大きな意義があるのではないだろうか。霊魂の行方などといった宗教的な観点だけではなく、葬儀を執行する上でのさまざまな立場の人たちとのつながりなど、社会的な意義についても多くの示唆を与えてくれるものとなるだろう。

## 一 葬儀における役割

### クワガラ

葬儀に際して、その執行の中心を担うのは、主に近所の人たちである。単に「クミの人」などということもあるが、矢吹町では、「クワガラ」または「クワガラキ」という互助組織ごじょそしきがあり、この人たちがさまざまな役割分担のもとに働くことになっている。一五から二〇軒程度の男女二人（主人とその妻）ずつで構成される。こうした互助組織では労力の提供だけではなく、少しずつ金銭を供出して共有の道具を購入するなどといったこともおこなっている。葬儀に使用するよ

うな食器や鍋、地域によつては霊柩車れいきうしやや祭壇、クド（カマドのこと。現在はガスコンロで煮炊きをするが、かつて薪を燃料としていたときにはクドが使われた）にいたるまで、こうした互助組織が管理した。そして、こうした共有財政は、葬儀にかぎらず、さまざまな儀礼や行事に際して使用された。こうした道具類を収めておくための小屋などを建てていた地域もある。また、地域の共有財産としての形で所有することがなかった地域では、農業協同組合（以下、農協）から借りてくることもあった。

葬儀の際には、世話人や「ロクシヤク」などさまざまな役割分担がなされる。これは持ち回りでおこなわれることになっているのが普通であるから、女性でもロクシヤクなどの役につくこともある。ただし、それはあくまでも表向きのことであつて実際には、代理の男性がおこなうそうである。男女二人ずつ手伝いには出るが、葬儀そのものをとり仕切るのは男性であり、女性は接待や料理などを担当する。

## 役割

葬儀の役割については、呼称や人数などに地域差がみられる。

まず、リーダー的な役割を果たす者が「世話人」とよばれる人たちである。二、三人というのをもっとも多いケースのようだ。クワガラを結成していない地域では、新年四日におこなわれる「ハツカイ（初会）」のときに、「区長」などともその年の「葬儀委員長」を決めるなどという例（中野目）もある。こうしたリーダーシップをとる人というのはだれでも順番がくればなれるようなものではない。前述の「葬儀委員長」というのは、昔の作法やその由来について詳しい古老をあてることが多いのだという。また、接待担当の女性たちの場合にも同様である。クドに薪をくべて、ハガマでご飯を炊いていたころは、ご飯が上手に炊けるようになってはじめて、女性は一人前と評価された。「ネツコメシ（いわゆるシンが残っているような、炊き方のまずいご飯）」になるようでは、こうした折の料理なども任せてはもらえないというわけであろう。女性の場合にも、ベテランの年長者がリーダーシップを発揮した。

次に、墓穴を掘り、棺ひつぎを担ぐ役割の人たちがいる。矢吹町全般ではこれを「ロクシヤク」というが、「タイヤク（大役）」という所もある（大和久）。ロクシヤクは、「六尺」をあてる地域と「陸尺」をあてる地域とがある。さらに、「ポッカリ」とよぶ

地域もある（原宿）。土葬の際に棺を運ぶ役割であるから、通常四人が割りあてられた。三角の布を頭につけて進むなどという地域もある（原宿）。古い写真などをみると、棺の運び方は、神輿みこしのように前後左右の四人で担ぐかつタイプのもので、リヤカーなどに積んでひいていくタイプのものがあつたようである。しかし、火葬が主流となった今日では、葬列では親族が「遺骨」を抱いて進むことになっている。つまり、ロクシャクそのものには実際の役割はなくなつてしまった。そのため、形式上ロクシャクの役割分担はあつても、人数が二人や三人に減つてしまつている所が多い。地域によつては、家から寺までは遺族が、寺から墓場までをロクシャクが、遺骨を抱いていく（中畑）などということもあるようだが、現在では有名無実化しているものの一つである。なお、棺について補足しておく。棺は「タデガン」と「ネセガン」の二種類がある。タデガンは、直方体の木箱（四〇×五〇センチメートル四方×高さ七〇センチメートル程度の大きさだという）で、遺体をひざを抱えるようにして座らせて押しこめる、屈葬くつさうタイプのものである。死後硬直しごうちようちよくが起きている遺体にはかなり無理な姿勢であつたようで、「足が出ていた」「血が滴したたつていることもあつた」「ボキボキと手足を折らなければはいらなかつた」などと、やや気味の悪い話も聞く。一方、ネセガンは、いわゆる伸展葬しんてんさう（ねせたまま棺におさめる方法）である。棺が大きくなるものの、遺体を棺におさめる手間としては簡単にする。明治時代の後半にはネセガンは広まつていたようであるが、墓地が急な斜面にあるような所では、運ぶのにコンパクトなタデガンを用いていた地域も昭和の中ごろまではあつたようである。

また「ジドリロクシャク」などという地域もある（中畑・大和久）。この場合、ジドリ（「地取り」の字をあてている）が墓穴掘りで、ロクシャクが棺を運ぶ役割となる。また、ジドリといわれる人たちが「カママワシ」という役もかね、コワメシを炊くこともおこなう例がある。女の人たちにもち米をといでおいてもらい、深夜になつてからふかかしはじめ



【写真10】ロクシャク（提供 後藤助一郎）  
四人で埋葬するところ。縄を使って穴におろす



【写真11】葬列 仮木戸（提供 星信之助）  
寺のカドグチの手前、葬列が曲がる所で竹を持って立つ人。その向かい側にも竹が立っている

ると、明け方五時ごろにできあがる。穴も掘って、米もふかすということで、この人たちは大変忙しいのだという。

香典などのとりまとめをする「チヨバ（帳場）」の字をあてるのが「一般的」は、必ずどの地域にもみられ、二人程度でおこなわれることが多い。

ところで、大和久では、「タイヤク（大役）」「コヤク（小役）」「チヨバ（帳場）」の役割分担がある。タイヤクとはロクシヤクのこと、チヨバは香典の整理をする係である。これら二者はほかの中畑・三神の両地域でも同様にみられるが、一方コヤクは「カリキド」をつくり、それを設置するのが二人と、「ミヨバチ」という葬列の先頭に立って鉦を鳴らして歩くのが一人の、合計三人である。このコヤクという役割は、ほかの地域にはないようである。というのも、カリキドをつくるという例がほかでは聞かれないためである。カリキド（「仮木戸」の字をあてる）とは、寺のカドグチに立てる竹二本でつくった門で、葬列はこの門をとおって寺へはいつていくのだという。ただし、

門といってもただ竹二本を持って立っているだけという簡単なものであるらしい。しかし、『奥州白川風俗問状答』には、葬列に「仮木戸」の文字がみえるから、この習俗は、古くは白河周辺の地域でもみられた習俗であったのかもしれない。

そのほかに、「テラヅカイ」と「ヒキヤク」（または「キカセ」という役割がある。テラヅカイは二人おり、寺へのお使いをするという意味で、戒名の依頼やお布施の交渉、細々とした買い物などもおこなう。

ヒキヤクは、葬儀があることを知らせて回る連絡係で必ず二人一組でおこなう。全国的には昼でも提灯を持って連絡に回るかと、名前を呼ばれても振り返ってはならないなどという、死者に引かれていくことを防ぐための習俗であるが、「必ず二人一組で」という以外には、矢吹町では聞かれなかった。現在のように通信技術の発達していなかったころは、遺族の指示を受けて、

自転車などで近隣の市町村を一日がかりで回ることもあったという。連絡を受けとるのは「ギリのある人」、特定の香典のやりとりを過去におこなっている人である。つまり、過去の「ギリ帳（香典受領記録）」をみて、喪主が判断して、どこに知らせるか決めるのである。なお、「ギリ」については後述する。携帯電話やEメールの発達した今日では、ロクシヤク同様、有名無実の存在であるが、それでも世話人らは喪主に「ヒキヤク、タデツカイ？（ヒキヤクを出しますか）」と尋ねることだけは、形式上おこなうのだという。

こうした役割を果たした人たちは、葬儀が終り三日七日の法要がすんだ後、喪主などの遺族から労いを受ける。

## 二 「ギリ」のこと

ここでいう「ギリ」とは、香典、もしくは交際の程度のことである。

ギリには、「イツシヨギリ（イツシヨウギリ）」と「ニシヨギリ（ニシヨウギリ）」の二種類がある。イツシヨギリは、米一升と現金一銭（または一〇銭）、ニシヨギリは、米二升と現金二銭（または二〇銭）のつきあいとなる。ニシヨギリは、「ホンギリ」ともいい、近い親戚たちのことである。ホンギリの女性たちは、手伝いにもいかなければならない（大和久）。また、クワガラの人たちも同様にニシヨギリである。そして、それ以外がイツシヨギリとなる。従って、過去のギリ帳をみれば、家ごとに、「あの家（とのつきあい）はイツシヨギリだ」とか、「あそこはホンギリだから、ヒキヤク立でくんちえ」などと、交際の程度がわかるようになっているのである。

かつては、どこか家庭にも「二升袋」「一升袋」という米をいれる巾着袋があった。葬式するときには、それに白米をいれて持っていき、中の米をあけて、現金をだし（香典袋などには包まない）、焼香をすませるといのが、申問の方法であった。今日では、米を贈ることもほとんどなくなってきているという。しかし、この考え方は今でも続いていて、チョーバには、半紙に書

かかれた米の相場が揭示されているという。とはいってもそう厳密なものではなく、たいてい「白米一升 金五百円也」という程度になつてゐる。たとえばイツシヨギリの場合、米一升分の五〇〇円に、一〇銭分として一〇円(または一〇〇円)をあわせて、五一〇円(または六〇〇円)をチヨバに支払つてくる。するとチヨバは、これを五一〇円と記入するのではなく、「白米一升 金一銭」と記入するのである。

「ギリは欠がさんねえ」といわれるが、その「負担」が大きくなつてしまつては困るというのが、人々の本音であろう。その「負担」を大きくしないことも大切な実際のルールであつた。つまり、イツシヨギリだつた人が、突然大金を包んでくるなどということ、かえつて迷惑なこととされた。

なお、以上にあてはまらない「故人と個人的に親しいつきあひをしていた」などといった場合には、現在は香典袋に現金三千〜五千円程度を包むが、これに対してはギリという扱ひにはしない。地域によつては、特に近しい人たちはうるち米ではなく、もち米を持つていくということもあつた(中野目)。ただ、こうしたギリの内容や範囲については、時代ごと、地域ごとに異なつていたようである。なお、香典返しは、砂糖一〜二グラムが一般的で、弔問にいった人にも「オフカシ」がついた。

ところで、葬儀や婚礼は、現在でもかなりの経済的負担を強いられる家庭の一大イベントであるが、今から百年ぐらい前はどうかだつたのだろうか。

### 三神「郷土誌」によれば、

一般に土葬となし、葬儀当日及びその前後に親族及び他部落会葬者に対しては酒を饗応し、親族町内手伝等は徒食日を重ね之が為に多大の金品を費し負債の責苦を受くるものさへあり。

との記載がある。葬儀の際の饗応が、大きな経済的負担となつてゐることがわかる。さらに、

香典料は、義理と称して、葬家に贈る贈品は金子白米で、近親縁者は金子のみなれども、組合内村内の者は、白米一升到金拾銭の如く贈る。他部落他町村よりの会葬者は、金子のみにて白米を贈ることなし。饗応、従来は組合内村内の会葬者にも酒を饗したが、現在は隣

郷（他部落他町村の会葬者）にのみ饗する。その膳部には、仏式精進料理にて、尚引出物として茶・砂糖・饅頭等を供す。その量は千差万別なれども、茶は四半斤砂糖は一斤位が通例である（二部、読みやすいように現代仮名遣いに改め句読点をうった）。

とあり、饗心の範囲が狭まっていることがうかがえるが、これは経済的な負担を軽減するための措置であつたのだろう。このように、葬儀の際には、葬儀を出す方は特に大きな経済的な負担があつたことがうかがえる。

そして終戦を経て新しい時代を迎えることとなつたが、それは物資の不足、食糧難の時代であつた。そうした中で、婚札や葬儀にかかる費用を軽減しようという動きがあらわれたのも当然といえば当然のことであろう。冠婚葬祭の簡素化などの目標掲げ、高度経済成長を迎える直前の昭和三十年から全国的に「新生活運動」という生活改善運動が展開されはじめた。

昭和三十一年二月五日に発行された『広報やぶき』には、新生活運動の具体的な目標が記載されている。それによると、

一、時間を励行したい

・集会時間も閉会時間も正しく

二、正月の門松を工夫せよ

三、迷信を何とかなくしたい

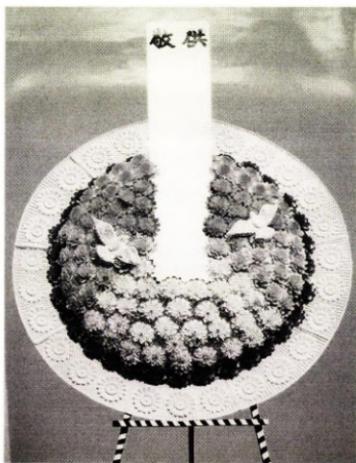
四、不幸の際の礼状とお返しの中（うち）どれかを廃止したい

五、冠婚葬祭を簡素化した

六、お酒を上手に使いたい

とあり、古い習慣に基づく生活を改めようとしたことがうかがえる。また、同年四月五日発行の『広報やぶき』にも、次のような呼びかけがのっている。

（前略）台所の改善も小さな行動範囲で各々職域に応じた食生活で冠婚葬祭の簡素化も宴会の肅清もべからず式ではなく良識をもつた



【写真12】花輪のポスター（提供 鈴木広）  
中央の白い部分に名前を書く。サイズは、73×103cm

創意と工夫から、しかも生産と直結してすべては積極的に経済効果のあるように新生活運動を推進し明るい家庭住みよい町、建設にお勉め下さいますようお願いいたします。（矢吹婦人会 清野さくの）

そこで矢吹町では、葬儀の際には「花輪」と「札状」の簡略化などが図られるようになり、花輪は一軒の葬儀につき「基まで」と決められた。それ以上になる場合には、農協などで花輪が描かれた三〇〇円程度のポスターを購入し、それに「花輪の料金」を添えてチョーバに提出する。チョーバでは、そのポスターを家の軒先などに次々と掲示していくのである。

しかし、ある程度社会的な地位のあるような人や家などの場合にはそうもいかず、敷地の外の道路に面した所には花輪を二基たて、それ以外のたくさんの方々の花輪は敷地の中に並べるなどといった苦肉の策がとられるようになっていった。そもそも、花輪のポスターは三〇〇円程度と廉価だが、結果的には弔問者は「花輪代」をポスターに添えて出すわけであるから、実質的に経費の節減などにはなっていない。むしろポスターを添える分だけ、余分な出金となっている。つまり、この方法では、単に花輪が家の周りに「並ばない」だけで、経済的な簡素化にはなっていない。結局、現在のようにたくさんの方々の花輪が家の周りに並ぶようになった。香典返しもがき一枚というころもあったようだが、それも定着はしなかった。

### 三 葬儀の執行

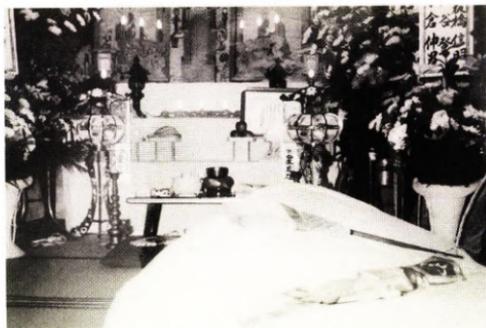
人が死ぬ前には、カラスが鳴くという。二、三日、カラスが気になるような鳴き方をすると「カラス鳴き悪い」といって、長

く思<sup>わづら</sup>っている人たちなどのことを「あぶねんでねえか」とうわさをした。ある話者によれば、母親の具合が悪いころ、出勤したときに「今朝はカラス鳴きワルガツタない？」といわれたが、自分にはまったく聞こえなかった。ところが、それからまもなくして母親が亡くなったという知らせがはいった。このように、「カラス鳴き悪い」ときのカラスの鳴き声は、死者の出る家の者たちには聞こえないのだという。

### 葬 儀

死人をシビトという。死者が出ると、すぐ「チカシシルイ（近しい親戚）」が集まる。そして、クワガラやクミ（以下、互助組織）の世話人の所、あるいは葬儀委員長のような立場にある人の所へ、彼らが連絡にまわる。そこから葬儀の準備がはじまる。葬儀日程を決めるのはさまざまで、死者の家で決めてしまう地域もあれば、互助組織が集まって相談して決める地域もある。また、土葬の際には、「墓案内」といって、家の者が墓地へ案内し、埋葬するための穴を掘る場所を教えておいた。その後は、先述したような役割分担を確認し、それぞれの行動に移っていく。

一方、死者は、身内の女性たちによって着がえをさせられる。まず、水にお湯をいれる作法で体をふく。一般にこの作業を湯灌<sup>ゆかん</sup>といい、この作法をサカサミズという。矢吹町では、特にこうした名称については聞かれなかったが、「水に湯をいれるな」という言葉は残っている。その後、夏は浴衣を、冬は袴を着せるなど、「セツセツ（節々）のもの」を左前に着せる。そして、北枕にし、遺体の上に箒<sup>はら</sup>と刃物をおく。従って、日常は「頭を北にして寝るな」という。また「シビトさカカル」といって猫を近づけるのを嫌う。なお、このとき使った箒は、一週間使うことができない。刃物や箒は、邪<sup>じま</sup>を払い死者の靈魂を鎮めるための道具として用いられているものであろう。特に箒は、呪いのための道具として、人生儀礼では全国的にみても用いられることが



【写真13】箒と刃物（提供 星信之助）  
死者の枕元に祭壇を築く。死者の上には魔よけの箒と刃物（袋に収められている）をおく

多いもの一つである。地域によっては、出産のときにも使用されることがある。生死の境をさまよっている不安定な「靈魂」を鎮めるための特別な力を持つ道具といわれている。そしてさらに、山盛りにした飯に箸を一膳立てたものや、生花、線香などを供え、祭壇をつくる。

## ニツカン

入棺の前には、にらぐん チョーナイまたはギリツケといつて一般の弔問客より先に、近所の人たちが香典をあげにくる。これはアシタノヒ（明日の日）が、つまり翌日が葬儀で忙しかったためである。

やがて、夕方になると知らせを受けた人々が弔問にやってくる。まず僧侶による読経どきょうがおこなわれる。これを枕経まくらぎょうという。弔問客には手ぬぐいが配られ、人々はそれを首にかけている。入棺の前には、一升の酒を銚子ちやうしにいれ、弔問客に回す。同時に、豆腐をカイシキ（赤い木の皿）に一切れずつのせたものを配る。これにヒヤシ豆（塩味の汁につけてある青い大豆）を添えることもある（中畑）。それぞれが口にした後、いよいよ入棺となるが、その際には荒縄を腰につけた近親者たちが集まって、剃刀かみそりの刃の反対側で死者の頬をなでる。昔は化粧をすることはなかった。そのほかの細々としたいわゆる旅支度については、仏具一式を業者などが用意してくれているから、それをつけさせる。家族がつくったりすることはない。入棺後、それまで使っていた布団や着物は、空き地などへ持って行ってその日のうちに燃やしてしまう。ただし、神式の場合には、これらのものはゴザに丸めて荒縄で結び、物置に七日間おいた後で焼却するのだという。棺の蓋は、石を使ってクギをうちつける。

入棺後、皆で線香をあげ供きょう応おうとなる。しかし、これは長寿だった人々には長い時間おこなわれるが、若くして亡くなった人々には早々に弔問客はひきあげる。このときの料理は互助組織の人たちがつくる。なお、亡くなってから葬儀まで線香の煙を絶やさない。

葬儀は友引と寅の日を避ける。正月に死人を出した場合には、その家はすぐに松飾りを外して正月を送り、またほかの家へはいかないようにする。どうしても、寅の日におこなわなければならないときには、棺に虎の絵をはる。これをトラガエシという。寅の日を忌むのは、「虎は千里いって千里帰る」といわれるためである。

葬儀当日は、クミの人たちが朝八時ごろには集まってくる。矢吹町の葬儀全般にはコワメシがつく。これは、アズキを使用し  
てつくるのだが、お祝い事のときにつくる赤飯のように色がつくようにはしない。これに昆布の佃煮くわだになどがつく。ときには  
〔なにを勘違いしたのか〕と疑問を投げかける話者もいるが、紅シヨウガがつくこともあるという。またアズキのかわりに白  
ササゲを使うこともある。このコワメシは、必ず青年やカマバン、カママワシといわれる男性がつくるという地域もあれば、女  
性がつくるという地域もある。また特に、入棺に混じらない人がやる。入棺をやる人はつくってはならないという地域もあった  
〔入棺の者がカマバンすると飯がふけない〕といわれる。中畑。このようにコワメシをつくることに関しては地域ごとにさま  
ざまな決まりがあるようである。

矢吹町やその周辺において火葬が一般的になったのは、昭和二十八年に公営の火葬場ができてからのことである。それ以前は、  
伝染病以外では火葬にする習慣は少なく、土葬が一般的だった。しかし、そうした中で、明新地区（明岡新田村）では、地区独  
自に火葬がおこなわれていた。火葬場は、村の共有地で、萱山・石切り場跡にあり、そこに木を重ね、柴木・薪木などを家人が  
準備する。体格のいい人が亡くなった場合などは、時間がかかるので石油なども用意した。火葬にする際に遺体が傾かないよう  
にするため、松の丸太の枕木や生木もいれるようにする。火葬する役を、オモヤク（重役）という。ジドリが二人、ロクシヤク  
が四人、ソイクチ一人である。オモヤクは輪番制である。墓地前の土壇で「送りの儀」がおこなわれた後、棺を荒縄でははって  
火葬の場所に移す。その後、男性はうつ伏せに、女性は仰向けにして、重ねた木の上にねせる。遺体を藁で覆い、周りは柴木で  
囲む。僧が読経したあと点火する。この際、葬送の際に使用されたものなども一緒に燃やしてしまう。オモヤクは、一人一本ず  
つ生木の指叉さすまたを持ち、遺体が傾くことのないように生木をいれながら火を見守る。その間は、施主が酒や料理などを届ける。遺  
骨が残っているところを見計らって、水をかけて火を消す。それにあわせて家人も火葬場に到着する。家人や親戚などが、篠竹しのだけと  
ウコギの箸で、互いに骨を挟はさみながら骨壺ぼんぼにいれていく。その後、墓地へいき遺骨を埋葬するというのが、次第である。この地  
域の墓地は石山の傾斜地にあるため、墓地への道もせまく、また墓穴も深く掘ることが難しかったという。こうしたことが、火

葬がおこなわれていた理由であるようだ。

今日では、ほとんどが公営火葬場を利用している。火葬は、午前中におこなわれることが多い。まず、火葬して骨にしてから再び家に戻り葬儀、出棺となる。つまり、入棺、火葬、葬儀、出棺、野辺の送りの、埋葬、ミツカナノカ（三日七日）の供養、精進あげの順で進められていく。

土葬のときには、前日に穴を掘った。午前中に穴を掘りはじめて、お昼ごろに終る。終るころには、お酒と食事などが届けられ、そこで食べてくる。掘った後は、穴に鎌をつないだ縄をはつてくるということもあった（三神）。かつては、謝礼としてロクシヤクにはわらじを渡したが、今は、靴下を渡すという所もある（三神）。

埋葬するときには、喪主から順に少しずつ土をかけていった。なお、土葬のときには、前述の火葬の部分を除いた式次第となる。

火葬も土葬も、出棺の際には、座敷から直接降りるのではなく、座敷の人と外にいる人との受け渡しで出され、ハンドメ（縁側）から出すことになっている。野辺の送りの出発は、だいたい午後一時ごろなので、火葬の場合にはそれに間にあうように火葬場から帰ってくるようにする。

野辺の送りの前に、昼食をとる。献立は、けんちん汁（サトイモ・ダイコン・ゴボウ・コンニャク・ネギ・豆腐など）、天ぷら（ゴボウ・サツマイモ）、キンピラ（ゴボウ）、漬物（季節の野菜）、ニシメ（サトイモ・さつまあげ・コンニャク）、吸物（ウドン・油揚げ・醤油の汁）、オコワ（しろフカシ||もち米・白ささぎ）などである。

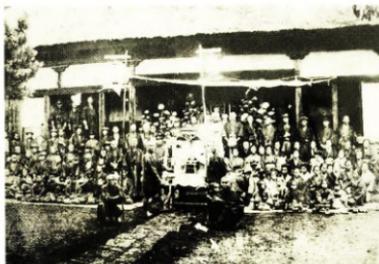
## 役 状

僧の読経の後、野辺の送りとなるが、このときの葬列順序のことを「役状」という。以下、矢吹を例にして、先頭から順にあげていきたい。なお、仏式である。

ソイクチ（添口）、地域によっては馬の口…これは本家の主人がおこなうもの。従って、その家の葬儀の場合には、本家での代がわりがないかぎり、いつも同じ人となる。中畑では、この人がロクジゾーとよばれるロウソクを持つ。添口は、寺のカドゲ



【写真15】昭和初年ごろ葬儀（提供 星信之助）  
（遺影の使用）右は明治41年のもの、左は昭和のはじめごろに撮られたもの。棺のところに注目。左の  
写真には「遺影」が飾られている



【写真14】明治41年葬儀（提供 星信之助）

チ（門口）の所でロクジゾーをおき、ロウソクに火を灯す。長寿で亡くなった人のときのこのロウソクは、キッソヨイ（縁起が良い）としてすぐに持つていかれてしまう。特に、お産のはじまったときにこれを灯すとお産が軽いといわれた。

位牌いは・このときの位牌は白木である。喪主が持つ。このとき、喪主は袴はかまをつけ、草履ぞうりをはくことになっている。墓地にいったら鼻緒を切り、持つていった下駄にはきかえて帰ってくる（矢吹）。あるいは、はいていった物を墓（門口）においてきて、足袋たび裸足はだしで帰ってくる。これは今でも続いているが、冬はかなり寒いのだという（三神）。

遺骨いづこ・火葬が普及してから出てきた役である。土葬の場合にはもちろん棺を運ぶことになるが、棺は最後尾についた。これについては後述する。

遺影いざい・昭和初期の古い写真を見ると、棺に遺影が添えられている。明治後期の写真にはみられない。大正から昭和初期に広まってきた新しい習俗だろう。

霊膳れいぜん・枕飯などをのせた膳。

香炉こうろ・線香をたくためのもの。

ロクゴウ（六郷）・ダンゴである。六合と記述する場合もある。平らなものと丸いものと二種類をつくる。これは、六と七の組みあわせで一三個つくることになっている。どちらがどの数でもよい。重箱にのべ紙をしき、そこに並べる。食べると虫歯にならないといわれ、みんなで墓地で食べる。特にだれががつくるといふ決まりはないようである。

盛菓子・位牌を大きくしたような板に、六個のビスケットのような菓子を貼りつけたもの（中畑・矢吹）。なぜ、このような形になったのかは不明。三神では、ラクガンや饅頭を三方

に盛ったもの。これもダンゴ同様、お墓で食べてくれば風邪をひかないともいう（三神）。

タカシヨク（高燭）・・ろうそくを灯すための燭台。  
しょうが

タイマツ（松明）・・火はつけない。稲藁一把をのべ紙で巻いたもの。明松とも書く。結婚式のときにも似たような物を使う。なお、ここまでは、比較的近い人たちの役割である。

コンゴウツエ（金剛杖）・・孫が持つことになっている。ウツギでつくった小さな棒を、のべ紙で巻いたもの。ウツギの木は、昔は畑の境界を示すものだったのでどこにでもあった。今はあまりみかけない。これは互助組織の人たちがつくる。孫の数が多い場合には、四本程度に納める。

スイトウ（水湯）・・湯飲み茶碗。なお、ここからが姻戚の義理の兄弟などの役となる。  
チャトウ（茶湯）・・水湯と同じ。茶碗を持つだけ。

机・・部落内の近い親戚が持つ。小さな机で、これは本堂まで。お寺にいかないときには墓まで。即席の祭壇をつくるのに使う。  
造花・・大きなハスの花の作り物。

生花・・生の花。

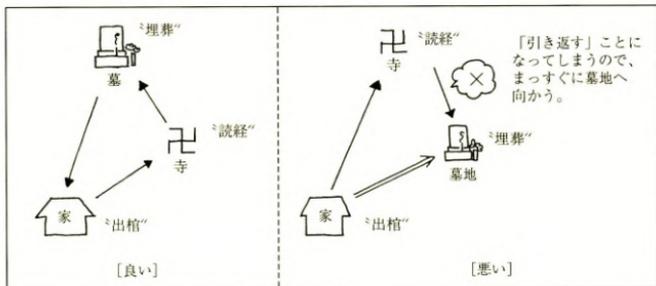
シカ（死花）・・色とりどりの紙でつくった花（花の形はしていない）。短い棒に紙を巻きつけ、それをかまぼこ状に切った



【写真16】葬列1（提供 星信之助）  
（盛菓子・高燭・松明）①盛菓子（ビスケットを板に貼りつけてあるタイプのもの）、②高燭、③松明



【写真17】葬列2（提供 星信之助）  
（さまざまな花）①造花、②生花、③金剛杖（孫が持つもの）、④死花



【図】葬制（道順）

アイコン（ジャガイモ⇨カンブライモのときもある）にさしておく。さしたまま墓に持つていく。

以上が基本的な葬列順序である。なお、役状などにはないが、ミヨーバチ（行列の先頭で鉦を打って歩く人）、笹のついた竹のべ紙などをつくったブツキ（仏旗）をつけて持つて続く場合もある。ミヨーバチは互助組織の人、ブツキは近所の子どもたちが持つことが多い。結婚式の席次同様、この葬列の順序の後先を巡ってもいい争いになることが多い。基本的には血縁の強い人たちから順に並ぶのだが、兄弟が多い場合などでは、どのように役をつけるのかは、中々の悩みどころであるようだ。水湯以下、死花まで、どうでもいいといえどもいいような役の人たちが、ぞろぞろと続くのも、こうした争いを避けるための一つの工夫といえるかもしれない。長い葬列では数十メートルにおよぶときがある。しかし、現在では交通事情などの理由から、墓地までの移動にはバスを使用することが多くなっている。なお、長寿で亡くなったときには、お金をまくこともあった。魔よけになるといわれ、拾ってお守りにすることもあった。

また墓地と寺、家の位置関係が悪いときには、寺にはいかず、まっすぐ墓地へ向かう。これは、「引き返す」という行為を避けるためである。

土葬の際には、棺は最後尾となる。ロクシヤクの人たちがリヤカーや御輿みこしを担ぐ。御輿を担ぐ場合、身長が合わない人たちがロクシヤクをやると、背の高い人が一番負担になって大変だったという。また、「棺が東に傾くと友を呼ぶ」という言葉も残っている。身長が合わないため、棺も傾くことがあったのだろう。実際に棺を運ぶのはロクシヤクであるが、これに近親の女性たちが従う。棺をのせたりヤカーや御輿の前方にエンソツナといわれる白い布（サラシ）がつけられている。もともと近い女性（姑の場合には、その家の嫁など）が棺に近い所をひき、



【写真18】葬列（提供 蛭田秀子）

【写真19】法要（提供 星信之助）  
（ミツカナノカの法要）①団子のはいった三方、②死花  
（ダイコンにささっている）、③塔婆

に続いてミツカナノカ（三日七日）の法要をおこなう。その後、家へ戻って精進あげとなる。

### 精進あげ

献立は、以下のとおり。  
にしめ・季節の野菜を使う。

コンニャク・コンニャクをゆでて洋辛子を添える。

漬物・季節の野菜。

天ぷら・季節の野菜など。なお、地域によってはかならず男の人たちがあげるといふ所もある。

吸物・ウーメンに油揚げを添えたもの。

ご飯・白飯でも赤飯でもよい。

ほかの女性たちが互い違いに並びながら、続いていく。このとき女性たちは皆、白い布を被る。また、棺の周りに紫色のメリンスの布をはり巡らす（ガンマキ）。この布をもらってきて子ども袖なしなどの着物をつくるのはキツソヨイ（縁起がよい）ことだった。また、位牌にかけた紫の布を細かく裂いたものはお守りになる、財布などにいれておくとうまいといわれる（中畑）。

葬列は寺の境内につくと左から三回、回る。寺での読経後、墓地へいき、再び読経後に焼香して葬儀は終了となる。続いて、一度門口まで退出し、さら

こうしたものに、生臭なまぐさといわれる刺身や煮魚がつく。また、葬式の精進あげでしかつくられない汁物がある。サケ缶で出汁をとった汁に醤油で味をつけ、ネギ、豆腐をいれたものである。「シヨウジンオトシノツユ」などということもある。豆腐を特に三角形に切る地域もある。中々おいしいものらしく、「これでウドンを食べたらいよいよのとは思いますが、葬式のときでなければ食べられないからなあ」などということも聞かれた。このときに、互助組織で手伝ってくれた人たちが家族から労われるのである。

### 法 事

弔たづないは、四九日、一回忌、その後は、三年、七年、一三年、一七年、五〇年（数え年）となる。しかし、五〇年忌は、若くして親を亡くした場合などにおこなうことになるので、不幸な人がやるといわれる。四九日までは、仏の魂は家の周りにいるといい、にぎやかなことは慎んだ。なお、こうした法要のときにも「シヨウジンオトシノツユ」をつくる。七回忌ぐらいになると近しい者だけで集まって、トウバ（塔婆）を立てて終るといった簡素なものとなることが多い。五〇回をすませると仏から神になるという。

仏壇の中に位牌が増えてくると、寺で処分してもらい、漆でぬつた位牌いれに白木の位牌をいれておく。日常はそれを拝み、それぞれの命日には位牌をとり出して拝むという。位牌には夫婦の戒名が書かれたものもある。墓も同様に、古い墓碑を墓誌に記入してまとめるといったこともおこなう。幼児が死んだ場合には、地蔵を立てることもある。

なお、葬式のことをザランベという。「ザランベできた」と「ザランベいつてきた」などと使う。また新盆にいぼんのことをアラボンともいう。

かつて、中風や老衰などでねたきりになると、家の女性たちが介護をおこなっていた。そのまま、自宅で息をひきとるのが普通だったが、救急医療体制が拡充され、加えて近年介護体制も整備されてくるようになると、ほとんどの人たちは「自宅外」で亡くなるようになった。病院や施設などで亡くなった場合には、看護師などによって清められた遺体を、葬儀屋が遺体を運ぶため、死の直後から「（死体の専門家）としての」業者業者がかかわることになる。その後、場合によってはすぐ葬祭場へ運ばれて

しまうこともあるから、「自宅から」彼岸へ旅立つための「儀礼・習俗」は次第に意味を失い、廃れていくようになる。矢吹町では、まだ自宅葬が多く残っているが、これらの社会的事象に人々の生活様式や価値観の変化も加わって、今後、ここに述べたような儀礼や習俗も姿を消していくことになるかもしれない。

#### 四 神葬祭のこと

明治元年（一八六八）の神仏分離令において、一般の民衆も神式で葬儀をあげることができるようになった。矢吹町の矢吹地区周辺では、知識階層や上流階層を中心に、一部仏式から神式へと変化した時期があった。その後、結局仏式に戻った家も多いが、まだわずかに神式で葬儀をおこなう家もある。神式の家だけが集まったクワガラキもあるが、周りがほとんど仏式である地域に住む人は、そこにまけてもらっている。結局、神式は少数派になってしまい、しきたりや方法などを知っている人も少なくなってきた。手伝いなどについても動いてよいかわからないことも多いらしい。

儀式や祭壇の一部に違いがあるほかは、ほとんど仏式と大差はない。ここでは、仏式と大きく異なる点についてのみ記述する。神主がいるうち、つまり、葬儀が終るまでは線香をたかない。祭壇は、一二メートルくらいのシメ縄に、ヘイソク（幣束）を正面に五枚、両側面に各四枚つける。

ヒヨウボク（標木。太さはさまざま。お金のある人は太い。一〇〜一五メートル四方）、銘旗（誰々命の棺などと書く白い布。葬儀屋で準備。これを笹の葉がついたままの竹につける）、霊璽（位牌のこと）、五色の旗（笹の葉がついたままの竹につける）と笹付きの竹四本（墓地に立てる）、六〇センチぐらいの櫛を三本（喪主用、神主用、自宅用）用意する。こうしたものはクワガラキの人がつくる。

『矢吹町史』第4巻資料編Ⅲには、明治四十四年の神葬祭のとり決めについて定めた文書が収められている。

神葬祭仲間規約書

一葬祭当日ハ早朝ヨリ施主方へ集合葬祭係トシテ仲間順番ヲ以テ四名ヲ置キ他ハ総テ施主ニ代リ賄方及小使等ニ至ル迄助合可致事

一穴掘六尺人足賃料ハ仲間負担ノ事 但シ負担ハ施主ヲ除ク

一葬祭当日 一般会葬者へ賄相済ミタル上ニ於テ仲間一同ノ賄受クヘキ事

但仲間賄ハ残品有合セラ以テシ引物等ノ如キ一般会葬者へ対シ悉皆引落無之ヲ認メタル上ニテ仲間ノ分ヲ申受クベキ事  
一葬祭当日仲間ヨリ霊供トシテ施主方へ酒五升ヲ進呈スルモノトス

但シ各料金ハ仲間積立金ヨリ支出スルモノトス

(以下略)

穴掘六尺の人たちに対して支払う賃金や使者への供え物については、「仲間」共同で出しあうということは、矢吹町では一般的におこなわれている。それに加えて、「仲間」への供応などは、一般会葬者の残り物ですますことと定めるなど、できるだけ支出を控えるようにしている様子もうかがえる。

葬祭の次第は、納棺のうかん、遷霊祭せんれいさい、通夜祭、火葬、家に帰宅後に葬場祭（告別式）、埋葬祭、帰家（キケ）祭の順で進行する。納棺などの通夜の執行は、仏式とほとんど同様におこなわれる。遷霊祭は、位牌に魂を移す儀式であり、土葬のときには出棺の前におこなわれた。葬場祭では、供物は、米酒を各一升、塩と水、鯛（尾頭つきの魚）、ダイコン、ハクサイ、ニンジン、ネギ



【写真20】神葬祭・葬列（提供 佐久間守成）

昭和4年ごろの葬列の様子。白い布で被り物をした女性たちがエンノツナ（女性たちの腰のあたりの位置にかすかにみえる白いもの）を持って並ぶ。棺の周りには白い布が巻かれている。棺は御輿のように4人で担ぐタイプのもの。なお、この写真は神式の葬列である。軒の前に建っているのは五色の旗であろうか。棺の後ろには標木がたつ

(これらの野菜の供物を「甘辛物<sup>あまから</sup>」という)を三方に盛って供える。玉串奉典は、遺族は榊、一般会葬者は洗米でおこなう。洗米とはいっても単なる白米で、洗ってあるわけではない。その後、神職が祝詞を唱え一同礼拝となる。このときは、二礼二拍手一拝で、拍手は音を立てない「しのび手」でおこなわれる。なお、死後も五〇日一年は、「しのび手」で拝む。

野辺の送りの葬列順序は、先達、位牌、写真、霊膳、遺骨ぐらいで、仏式のような多くの役はない。死花もない。位牌は墓までは持っていない。埋葬がすむと、自宅に帰り、故人がお世話になった人などを招待し、接待するのは仏式と同じである。

その後の供養を帰家祭という。五日祭、一〇日祭は、仏式でいう三日七日にあたる。以後、五〇日、一〇〇日(これを合祇祭という)となる。さらに先祖祭として、一年、五年、一〇年、二〇年、三〇年、四〇年、五〇年(満で数える)の法要がおこなわれる。

神式は仏式と異なり、死亡当日から、生臭、色物(ニンジンなど)を使ってもよいとされる。